

ふくらむ日記

田中小実昌



ふたふた
日記



田中小実昌

毎日新聞社



ふらふら日記^{にっき}

定価 一、二〇〇円

昭和六十二年九月三十日 第一刷
昭和六十二年十月十日 第二刷

著者 田中 小実 昌^{たなか こみ まさ}

編集人 川合 多喜夫

発行人 吉沢 孝治

発行所 毎日新聞社

〒一〇〇 東京都千代田区一ツ橋

〒五五三 大阪市北区堂島

〒八三三 北九州市小倉北区紺屋町

〒四四〇 名古屋市中村区名駅

印刷 精興社
製本 大井製本

© KOMIMASA TANAKA printed in Japan 1987

ISBN4-620-30586-3

ふらふら日記

目次

さてきょうは

親子電球 11

消えた教会 13

あかるい冬の日 16

千駄ヶ谷駅への道 18

三日坊主のギリシャ語 21

おそ起きは三文の得 23

ぼくの机の上 26

関東煮とオデンの差 28

犬の生活 31

ライオンのピル 33

道路はロードの博多弁

36

屁理屈と規律 38

西南女学院 41

ヤシの真似 43

正月もかわらず 46

犬猫騒ぎ 48

佐世保時代 51

誕生の地にかえる 53

テキヤの子分 56

ながれながれて 58

酔つてふらふら

オホーツク 63

登別温泉 65

雪が降つて 67

角館 72

加賀温泉郷潜行記 75

奈女沢温泉 86

湖西線のんびり旅行

有馬温泉のイチヨウ 109 99

記憶の底の港町 111

瀬戸内美味放浪 114

尾道と唐津

小倉競輪祭

130 127

たびたびの旅

バスにのってふらふらと

135

サンデイエゴの海

140

ぼくのロング・バケーション

143

シアトルそして……

149

シドニーにて

188

ボンダイ・ビーチ

209

シドニーのみどり

213

惚れ葉は何処

217

たびたびの旅

227

マドリッドの動物園

アムステルダム

238

236

ふらふら日記

題字・装画
村上 豊
装幀
コ
ス
ギ
ヤ
エ

さてきようは

親子電球

渋谷駅から池袋行きの都バスにのり、千駄ヶ谷小学校前でおりる。ここで、岡部冬彦さんと待ち合わせ、ぼくが生まれたところを、岡部さんがおしえてくださる約束だった。

戸籍謄本を見ると、ぼくは大正十四年（一九二五年）四月二十九日に、東京府豊多摩郡千駄ヶ谷町大字千駄ヶ谷四九一番地で出生となっている。そこに、東京市民教会というのがあり、ぼくの父が牧師をしていたのだ。

教会には幼稚園もあって、岡部冬彦さんはこの園児だったとき、頭の禿げた園長先生（牧師である、ぼくの父）に頭の毛の薄い男の子が生まれたのを、ぼんやりおぼえているような気がするそうだ。

ぼくの父は若禿げで、ぼくは生まれたときも、頭に毛がなかったらしい。それで、親子電球、とみんなで悪口を言ったという。大きな電球のなかに、ちいさな豆電球がはいっていて、紐をひくつぱると、パッと親電球がついたり、もういっぺん、紐をひくと、親電球が消えて、豆電球がついたりするやつだ。

たとえ幼稚園の園児でも、岡部冬彦さんは、梅檀せんだんは双葉より芳しかったはずで、親子電球なんて悪口も、幼稚園児の岡部さんあたりが言い出したのかもしれない。この東京市民幼稚園には、三木鮎郎さんもいっていたという。

幼稚園の保育室の机や椅子いすを片隅かたすみによせてつみあげ、広い床いっぱい布団をしいて、その上で、ぼくは手をつかわない、足でける背泳ぎみたいなことをやっていた、と母はそうはなしていた。

東京市民教会は、アメリカのシアトルの日本人教会の牧師だった久布白直勝先生が、夫人の久布白落実先生とともにつくった教会だ。ぼくの父は、シアトルで久布白先生の教会の信者になり、前後してニホンにかえってきて、久布白先生が結核でなくなったため、市民教会の牧師になった。市民教会は、東京都民教会と名前がかわり、現在は、世田谷区代田にあるが、牧師の井上喜雄先生から、教会の創立六十年記念誌をいただいた。

それによると、久布白直勝先生は、カリフォルニア州バークレイのユニテリアン神学校を卒業し、ハーバード大学でも神学、社会学、哲学を学んだという。当時の日本人としては、カントの本なども、たいへんによく読めた人らしい。ユニテリアンはプロテスタントの一派だが、マジメな人のおおく、理屈っぽいと言われた。ぼくの父は、久布白直勝先生とは、あとではずいぶんちがってきたけど、理屈っぽい男だったのだろう。

しかし、久布白先生やぼくの父も、理屈っぽいのなら、理屈で完結する物理学とかほかの科学

でもやればいいのに、イエスだ、十字架だ、と根本的には理屈でないところにいつてしまったのがおかしい。

不合理なるが故に信ず、というのも、じつは、はじめに信じてしまっていて、しかし、それを理屈では説明できず、だから、つまりは、こんな屁理屈へりくつをコネたのだろう。

ぼくも、小説のなかでまで、屁理屈を言ったりするけど、理屈にあったような暮らしをしていくわけではない。

久布白先生の奥さんの落実先生は、日本矯風会のリーダーで、戦後には参議院議員にもなった。一度だけお目にかかったことがあるが、福井県の勝山で、そのとき、ぼくはテキヤの子分だった。

消えた教会

ぼくは自分の生まれたところを、これまで知らないでいた。東京の千駄ヶ谷の市民教会の牧師を、ぼくの父がやってたときに生まれたことは、なんどもきいていたが、それが千駄ヶ谷のどこかわからなかったのだ。

十四、五年前、新宿から渋谷にいく都バスが明治通りをはしっていると、通りの右側に、東京

都民教会という教会が、ちらっと見えた。木造の、ちいさな教会の感じだった。しかし、ぼくが生まれた東京市民教会が東京都民教会になったのかもしれないけど、場所はちがってるんじゃないかな、という気がした。

ぼくは赤ん坊のとき、一歳までぐらいしか、そこにいないで、九州の小倉の西南女学院の牧師館に引っ越してるから、その場所をおぼえてるのではない。

ただ、母からきいたはなしでは、もっと、千駄ヶ谷の駅に近いようにおもったのだ。それに、クルマで混雑した明治通りに、ぼくの生まれた教会がモロに面してるなんて、信じられないことだった。母のはなしだと、近くに、池田侯爵邸とか、徳大寺公爵邸などがあって、千駄ヶ谷駅にでるまえには徳川さんのお邸やしきもあった、という。徳川さんの邸は、戦後も残っていて、大きく、古めかしい洋館で、千駄ヶ谷の駅のすぐそば、現在の都体育館のところにあったんじゃないかな。ともかく、それから一、二年たち、やはり、バスで明治通りをきて、東京都民教会をさがしたが、ふしぎなことに、見つからない。バスでいったり、きたりし、バスをおりて、あるいてもみたが、教会はない。

明治通りをあるきながら、あちこちで、東京都民教会のことをたずねるのだが、だれも知らない。

そのうち、とうとう、表参道までやってきて、「前に、キリスト教の教会が……？」と歩道に立ってたファッション屋のオジさんにたずねると、「ああ、そこ、ビルの工事をやってるところに、